

プレゼンテーションを目標とした授業研究 — Metaphor に現れた学習観を踏まえて—

鈴木 栄^{*1}

Learners' Beliefs about Learning English Implementation of English Expression I

Sakae SUZUKI

This paper reports on what beliefs Oyama Kosen students hold regarding English learning. Their beliefs were elicited via a discursive approach by investigating metaphors they used in a questionnaire. Metaphors are supported to reflect students' beliefs about their experiences of learning English. By classifying and examining their metaphors, what students think about learning English can be revealed. The paper also describes implementations of English Expression I, which were designed based on the findings of the students' beliefs.

KEYWORDS : learners' beliefs metaphor belief categories motivation

1. はじめに

高専における発信型英語について、臼田(2010)¹⁾は、「プレゼンテーション重視の英語教育の研究」で、「技術者を養成する高専においても、これからの技術者は世界で英語を使って活動することが求められている状況を見ると、コミュニケーション能力の基礎を養うべく、授業において英語でプレゼンテーションをする機会をできるだけ増やす必要があると考える」と述べている。文部科学省教育通信(No.230)の特集、「高専における英語教育の今」に、全国の高専における英語教育の取り組みと課題がまとめられているが、武田(2009)²⁾は、英語教員が関わる、JABEE 基準では、地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養、日本語による論理的な記述力、口頭発表力、

討議などのコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を挙げている。こうした目標を達成するための英語の発表力(プレゼンテーション能力)向上の取り組み例としては、英語プレゼンテーションコンテスト、英語合宿、国際交流、テレビ会議、などが報告されている。

一方、高専の英語教育の問題点として、学生のモチベーションと学力の低さが指摘されている(工藤, 2009³⁾; 亀山, 2009⁴⁾)。Tsui(1996)⁵⁾は、英語学習に対する不安や、低いモチベーションの原因として、香港の高校生対象の研究の結果から、students' perceived low proficiency in English (lack of confidence), students' fear of mistakes, teachers' intolerance of silence, incomprehensible input をあげている。Nunan(1999)⁶⁾は、とくに speaking における reluctant speakers の原因として、anxiety (不安

^{*1} 一般科(Department of General Education), E-mail: sakaes@oyama-ct.ac.jp

感)と低い motivation(モチベーション)を挙げ、モチベーションの低さについては、その原因を lack of success over time/ lack of perception of progress, uninspired teaching, boredom, lack of perceived relevance of materials, lack of knowledge about the goals of the instructional program, lack of appropriate feedback があるとしている。

1. 1 英語表現 I

高専の英語教育におけるコミュニケーション能力の育成が、JABEE 規準などでも要求されていることもあり、小山高専でも、英会話の授業に続く、英語表現 I の授業が開設されることになった。低学年の時に英会話の授業を受け、徐々にコミュニケーション・スキルとしてのプレゼンテーションの技法を授業の中に入れていくことが必要である。

4月から新設科目、「英語表現 I」を担当するにあたり、こうした背景を考慮しながら、授業を組み立てていくことになった。英語表現 I では、プレゼンテーション、スピーキングを中心とした科目である。まず、学生が、英語を学習することに対してどのような考えを持っているのか、学生のこれまでの英語学習はどのようなものであったか、学生の望む英語の授業とはどのようなものかを知るために、4月にアンケートをおこなった。

本稿は、アンケート調査の結果得た、学生の belief(考え方)を分析し、その結果を「英語表現 I」の授業に反映させた前期授業の報告である。

2. Learners' Belief 研究

ESL(第二外国語習得としての英語)の研究では、学習者に焦点が当てられてきており、learners' belief(以下 ビリーフとする)が注目を浴びたのは、1980年代であった。学習者のビリーフとは、学習経験などにより作りあげられた、学習に対する考え方である。一人ひとりの学習者の持つビリーフは、同じではないが、共通した学習経験がある場合には、同じようなビリーフを構築すると考えられる。

学習者のビリーフの研究が必要であるのにはいくつかの理由があげられる。ビリーフとは、メタ認知に属し、考えの中に「信じているもの」「こ

だわっているもの」として持っているものである。質問をされて自覚しているものとしてビリーフが出てくる場合もあるが、多くの場合は、表面には出てこない(Kato & Yamaoka, 2000)⁷⁾。しかしながら、学習者は、自らの内部に存在するこのビリーフに従って行動をし、学習方略(ストラテジー)を組み立てていく。従って、学習者のビリーフを知ることは、教える側にとってシラバスを作りあげる上でも重要である。Wenden(1987)⁸⁾の研究では、インタビュー調査の分析から、学習者が言語学習についてビリーフを持っていること、そのビリーフに従った行動をしていることを指摘されている。

ビリーフが学習者のメタ認知的な支えであると考え、それを変えることによって、学習者のストラテジーが変化すると想定される。学習者がどのようなビリーフを持っているかを知ることにより、学習者のストラテジーが想定できる。つまり、間違ったストラテジーを実践している学習者は、誤ったビリーフを信じていることになる。学習者が、より効果的な学習をすすめる、よい結果を出すためには、ビリーフを変えるような働きかけが必要となってくる。教師の側から見ると、そうした学習者のビリーフを知ることが授業運営の役に立つ。Hashimoto(1993)⁹⁾は、学習に悪影響を及ぼすビリーフを修正できる可能性があり、それが学習ストラテジーに影響を与えると述べている。

ビリーフ研究は、Horwitz が1980年代に作った BALLI を使用し、因子分析を使い統計的に分析をする研究が主流を占めていたが、BALLI 使用のみの研究に対して疑問の声が上がってきた。BALLI を使わない、alternative approach として、Kramsch (2006)¹⁰⁾は、metaphor を使いビリーフを取り出す研究をおこなった。Kramsch によると、言語を学ぶことは、新しい場所を旅するようなものである、と書いたとすると、その学習者は、頭の中で、source domain である travel を、target domain の言語学習へ繋げているわけであり、それゆえに、外国語を学ぶことを概念化している、というのだ(p.112)。Kramsch は、UCBerkeley の14の外国語を学習する学生953人に、アンケート調査をおこなった。目的は、学生が、自分の言語学習経験をどのように概念化するかを調べることであり、metaphor を取り出すことで、それを探ろうとした。質問は、1. Learning a language is like

2. Speaking this language is like..... 3. Writing in this language is like であり、「言語学習の経験をどのように描写するか」を聞いた。この研究で、Kramsch は、ビリーフが学習者や教師の固定した観念の反映であるという従来の見方から、ビリーフを持つ者と、彼（女）等が経験をメタファーを通して表現する方法に焦点をあてた。そして、ビリーフの性質として、conflictual で paradoxical であること、ビリーフそのものではなく、ビリーフを持つ者に焦点を当てたことで、彼（女）等の内的世界と将来の行動を予測できる、としている。

これまでのビリーフ研究では、学習者がどのようなビリーフを持ち、そのビリーフが構築された要因、過程は報告されているが、その結果を、実際、教育の場面でどのように活かすかという研究はほとんど無い。鈴木(2005)¹¹⁾ は、ビリーフ研究の結果を、学習者への学習アドバイスとして活用する提案をした。今回の研究は、研究と教育実践を結びつける試みである。

3. 本研究

Kramsch (2006) が、metaphor is an intrinsic part of our conceptual apparatus (p.111) として metaphor を使い、learners belief を探った研究をモデルとして、小山高専 4 年生の英語学習に関する belief (ビリーフ) を調べた。4 月の最初の授業におけるアンケート調査の 1 項目として、「あなたにとって英語を学ぶことはどういうことですか。() に言葉 (文) を入れてください。英語を学ぶことは () のようである」を入れた。回答に対する理由・説明も求めた。集めたデータは、表にまとめ、意味が不明な回答については、学生に再確認をした。

3.1 研究対象

英語表現 I (2010 年新設科目) を履修している小山高等専門学校の 4 年生全員 (200 名)。回答数のうち、メタファーの回答が無回答であった数と、回答が、カテゴリーに当てはまらない不適当回答であったものを除く 172 名分のデータを分析の対象とした。

3.2 データ分析

メタファーを解釈し、focus-coding (佐藤, 2008)¹²⁾ により、コーディングをおこなった。その後、類似したコードをまとめカテゴリー (categories) を引き出した。各カテゴリーは、学習者がメタファーによって表した英語学習観の傾向を示している。

4. 結果と考察

4.1 メタファーのカテゴリーと分析

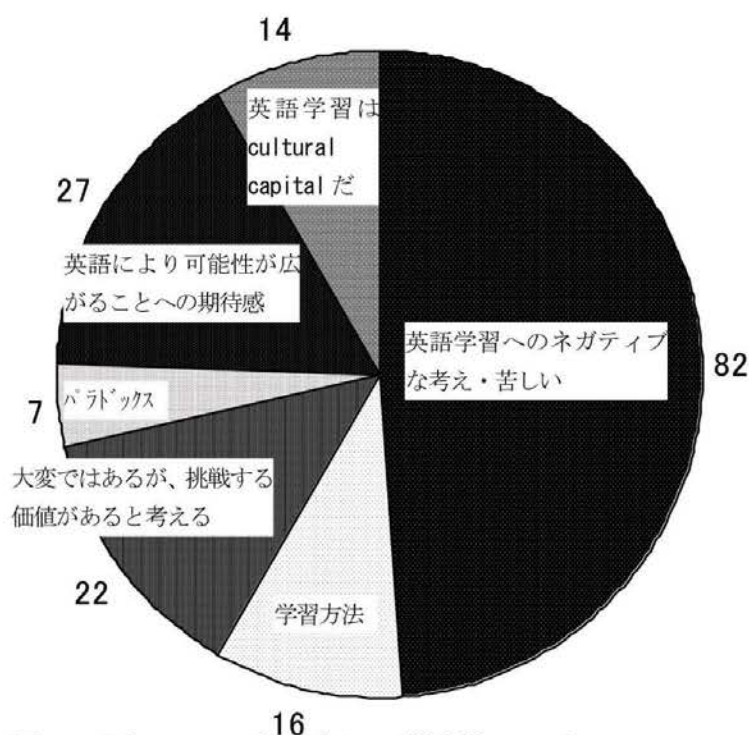


図1 メタファーのカテゴリー (学生数 172)

(1) 英語学習へのネガティブな考え・苦しさ
172人中82人

学生の書いた英語学習を苦痛であるとするメタファーは、3つのカテゴリーに分類することができた。physical pain (肉体的な苦痛) を表したもの、手の届かないことへの挑戦により、自分の力に限界を感じたための苦痛、そして、無力感である。

表1 英語学習へのネガティブな考え・苦しさ

サブ・カテゴリー	メタファー

肉体的な苦痛	頭痛・潜水・寒中水泳・拷問・苦行・針のむしろ・地獄・玉ねぎの丸かじり・2週間何も食べていないこと・高専に歩いてくる（つらい）
挑戦と限界	山・崖登り・暗闇模索・2階から目薬・高専生からPCを取り上げること（無理です）・台風の日に傘をさす（骨が折れる）・ネコに芸をしこむ・
無力感	ムダなこと・数学と同じ・明かりの無い道・他人事（使う機会がないので）・無人島に残される

学生の英語学習へのネガティブな考え方は、「嫌なことをやらされている」「学習方法がわからず途方に暮れている」「目的意識がない」「諦め」にまとめられる。英語学習に関してこうしたネガティブな考え方ができた背景には、これまでの学習経験、成績不振などが想定される。英語をなぜ学習するのかという問いに対する根本的な回答が自分の中で確立されていない。また、英語の学習は、水泳・苦行などのメタファーに表れているように、訓練のようなものであると考えている。

（2）学習方法 172人中16人

学習方法に関するメタファーは、5つのカテゴリーに分類された。基礎の重要性、継続の重要性、組み合わせの重要性、別の勉強法の提案、初歩からの学習である。

表2 学習方法

サブ・カテゴリー	メタファー
基礎の重要性	ピラミッドを作る（基礎が大事）・つみき（土台（基礎）が大事）・ものを集めること（少しずつ知識を集めるから）・用法や用量を守って正しくすべき
継続の重要性	水を飲む事（毎日欠かさず10分でも5分でも続けることが大切）
組み合わせの重要性	パズルゲーム（単語と文法を組み合わせさせてパズルのように文を作るから）・ブロックの積み重ね
別の勉強法の提案	遠回り（日本の授業で英語を習うより、3ヶ月間英語圏に放り込まれた方が早いと思う）
初歩から	ドイツ語を習うこと・ベイベー（言

の学習	葉を教わっている）・手話の勉強（名詞・動詞などの手話の表現を覚えるのと、英単語を覚えるのは同じようだと思うから）
-----	--

このカテゴリーに属するメタファーからは、学習者の言語学習への分析が含まれている。言語学習には、基礎が大切で、積み上げることで達成できると考えている。また、言語学習とは、単語と文法を組み合わせ文を作る、英単語を覚えるなどの学習方法が唯一の学習方法であると考えている傾向がある。そうした学習経験から、実際に使える英語が身につかないと考え、英語圏に行くことが効果のある学習方法であると考えている学生もいる。自分の英語力の評価が低く、自分の英語学習は、赤ん坊に一步一步教えるようなものであると考えている学生もいる。これは、Kramerschの研究結果に同様のメタファーが出てきたことが興味深い。Kramerschは、Returning to a childhood state というカテゴリーにしているが、メタファーは、leaning to walk / being three years old である。外国語を学ぶ学生の一般的傾向かもしれない。

（3）大変ではあるが、挑戦する価値がある 172人中22人

英語を学習ことは、挑戦する価値があると考えたメタファーは、3つのカテゴリーに分類された。達成感を味わう、過程が楽しい、挑戦である。

表3 大変ではあるが、挑戦する価値がある

サブ・カテゴリー	メタファー
達成感	登山（上を目指すのはもちろん、途中経過がはっきりしている・道は辛いが頂点にたどりついた時の達成感がすごい）
過程が楽しい	海を泳ぐこと（難しいけれど楽しい）旅行（勉強するのは自分だし、未知だから）

達成感を味わうことができた経験があったか、英語学習以外の学習や経験から達成感を味わった経験を英語学習に結びつけたのであろう。何かを達成したという感覚を味わえると考えすることは、強い動機づけとなる。また、大変であるとわかっているが、自分の力への自信と、未知のものへの希望が前向きな考え方を作り上げていると考えら

れる。

(4) パラドックス 172人中7人

戦争(自分がやらなきゃいけないという気持ちとやりたくない気持ちの争い)・まるで生きるための盾(外国で迷ったとき話せないと帰れないし、食っていけない)・良薬口に苦し。

学生は、英語を勉強することに対してはポジティブな考えを持っていないが、英語は、「勉強しなければならないもの」「成績のために勉強しなければならない」と考えていることがわかる。

(5) 英語により可能性が広がることへの期待感
172人中27人

表4 英語により可能性が広がることへの期待感

サブ・カテゴリー	メタファー
世界との繋がり	自分の世界を広げること(英語によっていろんな人とコミュニケーションがとれる)・国際化社会への第一歩(世界中の人々とコミュニケーションをはかるのに、まずは英語が必要だと思う)・木の枝
自身の変化	自分の引き出しを増やすこと・己の進化(自分自身を造り変えること)
異文化理解	異国情緒に触れること・婚活
楽しむ	サッカーをやる(英語は楽しい)・趣味を楽しむこと

英語学習へのポジティブな考えは、英語による外国人とのコミュニケーションの広がり、自己変革への期待、異文化を理解することへの期待、行動範囲の拡大への期待にまとめられる。これらは、学生が、imagined community(仮想コミュニティ)を作り上げていると言える。imagined communityは、Norton(2001)¹³⁾提唱したアイデンティティを巡る sociocultural theory の概念であり、学習者が、現在はその一部ではないが、将来、その一員となるであろうコミュニティを想像し、学習へのモチベーションが刺激される、とするものである。Murphey, Jin and Li-Chi(2004)¹⁴⁾は、この imagined communities を最大限に利用し、学習者のやる気を起こすことができる、としている(Teachers are in powerful positions to help create such imagined communities and to stimulate or stifle them (p.84))。学生の中には、こうした imagined

communities を持ち、英語の役割を考え、英語学習がもたらす効果を意識しているものもいる。

(6) 英語学習は cultural capital である
172人中14人

運転免許を獲得する(自分のものになれば生活の幅が広がる)・給料UP(今は、TOICの点数も条件にある所もあるから)・国際結婚への第一歩・基本に戻る(単位を落としたから)・アリとキリギリス(後で助かる)・空気(英語ができないとマレーシアでは生きていけない)・今の時代には必要なこと・未来投資(今はあまり使わないが後々役に立つから)・将来のビジネスのため cultural capital は、Boudieu(1991)¹⁵⁾が命名した概念であり、言語学習に当てはめられて議論されてきた。言語を学習することが、文化的な資本となると考えることである。学生のメタファーの中に表れた運転免許・給料UP・未来投資・ビジネスなどは、英語を学ぶことで得をする、英語を学ぶことが自分への投資になると考えている。

4.2 その他のアンケート項目への回答

(1) 英語学習の目標(ゴール)

英語学習の目標への回答のまとめは次のようになった。

表5 英語学習の目標

英語学習への目標	回答人数
意志を伝える・英会話・海外旅行で使える英会話を身につける	80
外国人と普通に話せる(ぺらぺら)・日本語と同じように話す	29
英語圏で生活できる	31
英語で本を読んだり、映画を観る	14
進級・卒業ができる単位が取れる	11
仕事をするのに困らない英語能力	8
外国人の友人を作る	8
TOEIC高得点・英検合格	8
学習にゴールは無い	8
ジョーク・スラングがわかる	4
自分の思っていることを伝える	2
英語で論文を書く	1

(2) 海外経験 回答者数 184人中39人
(アメリカ・オーストラリア・ハワイ・NZ・グ
アム・台 湾・韓 国・中国・モンゴル)

(3) 学校の授業以外での英語学習(220人中)

①している (46)

②していない (174)

①の回答内容: 授業の予習・海外のニュース・ラ
ジオのリスニング・映画・E-mail・オンライン
ゲーム・英語のニュースサイト・英会話・英検

4.3 まとめ

学生のビリーフは、学生が考えていることを知ることと、授業を作り上げる上で、非常に参考になる。一方的な授業ではなく、学習者の voice(声)、過去の learning history(学習歴)に注目しようという流れは TESOL(TEFL)においても主張され、learner contributions(学習者の貢献)とされている。今回の調査でも、半数の学生が、英語学習に関してネガティブなビリーフを持っているという結果を受けて、授業のやり方、教材の選定、学習目標の設定、評価方法、学生へのフィードバック、学習方略(strategy)を教える、わかりやすく興味が沸くような課題の設定、などを検討していく必要があると考える。また、学生が、過去の学習経験に捕らわれないように、change the dynamics(クラスの動きを変えること)も必要であろう。学生が、過去の学習経験に捕らわれて英語学習に関して固定観念を作り上げることが無いように、教える側も、固定観念に捕らわれず、時には、John Fanslowの主張する breaking rules(固定観念を壊すこと)により、教室に新しい風を吹き込むことも必要なのではないだろうか。英語学習にネガティブな考えをもった学生が、「英語は面白い」「英語は自分を変えるもの」「英語は、可能性を広げる」というビリーフに変えてくれることを願う。ポジティブなビリーフは、学習へのモチベーションになるからである。

5 英語表現 I の授業展開

5.1 授業目標

英語表現 I の授業を組み立てるにあたり、学生の英語学習に対する考え方と、彼らの考えている

学習目標、JABEE の教育目標を考慮した。学生のメタファーからわかったことは、多くの学生が、英語学習を苦しいものであると感じており(172人中82人)、英語学習に対しては、単語を暗記したり、文法を学習するものであると考えている一方、英語を学ぶことに対して、挑戦する価値がある(172人中22人)、または、英語学生の可能性への期待(172人中27人)を持っている学生がいること、であった。アンケートへの回答として、学習目標で多く挙げられていたのは、意思を伝える・英会話・海外旅行で使える英会話を身につける(80人)、外国人と普通に話せる(29人)、外国で生活できる(31人)であった。学生は、**コミュニケーションな英語学習を期待している**とわかった。JABEE の教育目標と学生へのアンケート結果、TESOL 研究の文献(加賀屋、2010¹⁶⁾、都築・新垣、2010¹⁷⁾を基に、英語表現 I の目標を次のように設定した。

- 1) コミュニケーションを軸とした授業展開。
- 2) 学生の outcome を増やす。
- 3) 学生の英語学習への不安(anxiety)を取り除き、楽しいと感じ、自信を付けるような授業にする。
- 4) 外国の文化や価値観を知ることができるような内容を入れ込む。
- 5) 問題解決について考える機会を作る。
- 6) 口頭発表ができる機会を作る。
- 7) 学生が、お互いに考えを出し合うことで新しい知識が生まれる機会を作る。

5.2 授業展開

- 1) 科目: 英語表現 I
- 2) テキスト: Speaking in Public 成美堂
- 3) 授業の達成目標(シラバス)
- ①日常生活の身近な題材について、英語で聞いて理解し、その内容について自分の考えを話す。
- ②英語を使い、意見を交換し、意見をまとめる。
- ③英語を使い、スキット作成、ディベート、およびグループ発表をおこなう。
- ④トピックについて調べたことについて、フォーマルなプレゼンテーションをおこなう。
- 4) 評価方法
- 定期試験 40点 リスニングテスト 20点
- スピーチ 20点 ポートフォリオ 20点

前期の授業

IW 個人作業 GW グループワーク

PE 相互評価 IP 個人発表 GP グループ発表

1	Questionnaire / Introducing school and area (GW) Self-introduction (GW) (IP) 学習観・学習歴を知るためのアンケート授業についてのオリエンテーション 自己紹介 (様々な状況での自己紹介と相手の反応を考える)
2	Introducing school area Textbook Unit 1 Pre-course activity (IW GW) テキストの内容 (自己紹介) リスニング・表現確認・英語 QA 学校 (小山高専) 紹介 (好きな点と嫌いな点) GW GP (板書) 他のグループ発表のメモを取る
3	Talking about hobbies (IW GW) Textbook Unit2 (IW) Speech organization (IW) テキストの内容 (趣味について話す) リスニング・表現確認・英語 QA スピーチの仕方について (オリエンテーション)
4	My hobby - presentation (IP) (GW) (PE) プレゼン ペーパー提出 (添削・返却) 広告作りの案を考えてくる (GW・IW) (物を選ぶ)
5	広告の作り方 (オリエンテーション) (IW) (GW) グループで持ち寄った内容を検討し、内容を決める
6	広告のプレゼン (GW) (GP) (PE) Textbook Unit 3
7	Comparing Two Things / 比較表現の復習 (IW) (GW)
8	Similarities & Differences (IW) (GW) (GP)
9	Review of Exam. / Correction (IW) (GW) テストの復習 学生答案から集めた間違いの修正
10	Contrast / Show & Tell (IW) (GW)
11	Show & Tell Presentation (IP) (PE) 自分が現在夢中になっていることに関してのプレゼンテーション ペーパー提出 (添削・評価後返却)
12	Doing a research 1 (Holiday) 結果分析 (GW) (GP)
13	Doing a research 2 (Million Dollar Debate) 結果分析 (GW) (GP)

14	Making Quiz グループ別に国を選び、カテゴリーに沿って問題を作成する。各カテゴリー3問 (上級・中級・初級) 学生の選んだ国: ドイツ・スペイン・パチカン・オランダ・モナコ・ジャマイカ・ブラジル・オーストラリア・イギリス・イタリア・台湾・ホンジュラス・ジンバブエ・キプロス・中国・北朝鮮クイズは、鈴木が World Quiz (Category: Science / People / History / Culture) でおこない、役割を示した。各グループは、MC (司会)、記録 (各グループの獲得点を記録)、リーダー (問題を読む)、を決める。ここでの発表では、organizing を学ぶ。
15	Quiz Show (GP)
16	Portfolio 提出

アクティビティーには、自分のことを話すことから、人の意見を聞いたりまとめたりすることを入れていった。そして、研究の基礎である、リサーチの初歩的な活動をおこなった。リサーチ1では、夏休みが近い7月に、グループの中でホリデーに行きたい場所を聞き、それを数でまとめ板書した。そして各グループから習った表現を使い (Most students One-third of students) 分析を発表した。また、集めたデータをカテゴリーに分ける分析方法を使い、グループの学生の意向をまとめ、発表した。

リサーチ2では、「もし2億円を持っていたらどうするか」という問いに対する答えをグループの中でまとめ、リサーチ1と同様に発表した。グループ発表 (板書) でわかったことは、ほとんどの学生が、お金を自分のために使う、物を購入 (車など) する、であった。

外国語を学ぶことの利点の一つに、異なる価値観を知ることができることがある。小山高専の学生を見ていて感じたのは、そうした価値観を知るための異文化体験が少ないということであった。多様な価値観に触れ、自分の価値観を作り上げていくことが学生には必要であると考えている。そこで、海外の同じような年齢の若者が同じトピックでどのような意見を言っているかを知るために、イギリスの教材を使用した。学生の写真と、彼 (女) 等の意見が載っている。Million Dollar Debate では、5人のイギリス人の学生が異なる意見を書いている。「自分だけのために全部使う。

人生は短いので、パーティー、世界旅行、デザイナーの服、高級車など」「高校の時に、先生が癌で若くして命を落とした経験があり、がん撲滅のための研究施設に寄付する」「父親が失業し、母親がアルバイトで生計を助けている。両親の夢であったマイホームを建てたい」「自分は学校にも行けるし、食べ物を住む所もあり、そういう意味では、すでに豊かであるので、お金はいらない。開発途上国に寄付したい。」「お金を投資し、利息で生きていく。嫌いな仕事をしなくてもいいし、好きなことができるから」この、5人の学生の意見を英語で読むことで、表現を学び、その裏にある価値観を知ることができる。欧米、特に、ヨーロッパでは、ノブリス・オブリジェ（持てる者は与えることで社会に貢献する）という価値観があり、学校教育の場でもそういう価値観を教えている。寄付をしたいという意見は、イギリスの学生の意見を読む前には、各クラスで1人くらいであったが、読んだ後に、寄付への賛同の意見がかなり増えた。寄付という選択があることを知った上で自分なりの意見の持つことが大切である。

5.3 学生の reflection を知るため、学生を知るためのアイデア

●Today's expression (異文化学習として) : 毎回覚えることで、積み重なり会話的な表現を学ぶ。文化の違い、言語の違いを知る。題材は、鈴木が、海外ドラマ・映画のDVDから学生が使う頻度の高い表現、外国の文化を知ることができる表現を抜き出した。できるだけ、学生の日常生活と関連させたスキットを紹介し、逆に学生が、どのような状況でそれらの表現を使うか、スキットをペアやグループ作ることもおこなった。英語の言語知識だけではなく、社会言語的な知識も必要である。例: TGIF It is not the end of the world Oops!

No kidding It's a piece of cake No offense
Go for it I got it Don't be a stranger

●ポートフォリオ: 授業内容をまとめ、reflectionができるようにする。授業に積極的に参加する。評価に入れ込む。表紙には、What I am. (自分はどのような人間か)を表すデザインをするように伝える。



● Coffee Break : 海外の文化・言語紹介 英語の勉強への tips 学生のプレゼンの内容など



●授業評価(毎回自己評価・授業評価)を書く。教師からのフィードバックを毎回書く) 学生とのコミュニケーションを図る。授業作りへのヒントとする。毎回授業の後に、学生の評価を読み、コメントを書くのは、クラスサイズの大きい高専では楽ではない。しかし、コメントを質問への回答に使うこともできることと、私がきちんと読んで、ということを示すためにも、コメント書きは続ける意味があると感じている。

DATE	自己評価(コメント)	授業評価	授業に対するコメント	質問など
1	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
2	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
3	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
4	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
5	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
6	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
7	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
8	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
9	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
10	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
11	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
12	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
13	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
14	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
15	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
16	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	
17	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	A B C D	授業内容が面白かった。先生の話が面白かった。	

5. 4 テスト結果(平均)

定期試験は、授業の確認の内容を中心に、英語を書かせる問題を4割、選択問題を6割出題した。

	4D	4C	4E	4A	4M
中間	80	84	80	80	81
期末	78.4	79.7	72.6	74.3	78.2

5. 5 アンケート結果

1) テスト(前期)に書いた授業の感想

○先生の授業は、日本的な文法や単語をひたすら覚えたりする授業ではなく、自分でいかに英語を使って表現するかを学べるのでとても楽しいです。将来、英語を使ってスピーチする場面に出会ったらこの授業で学んだことを役立てたいです。
○とうろん形式の授業をあまり受けたことが無かったので、毎回楽しく授業ができます。それに、班ごとにいろんな発表を聞くことができるので、おもしろいし、コミュニケーション能力が上がる気がします。

○授業面白いと思う。けど、考える力が弱いと、割とつらいと感じることもある。考えるポイントがあれば助かるかも。

○グループ学習楽しいです。グループ学習によって使ったことのない単語をいくつも使いました。どのようにすれば相手に伝わるのか、と以前より考えるようになりました。

○文法や難度の高い宿題よりも、スピーチなどの自由書きで、それを先生に修正してもらった方が頭に入りやすく勉強しやすいです。

○高専生といえば完全な理系、機械オタクなのであって、英語を得意とする人はほとんどいない。高専英語はすでに3年と少し勉強しているけれど、正直、毎年同じような演習ばかりで力がついたとは思えず、高専だからそれでもいいのかなと思ってしまうこともある。今回、英語表現Ⅰという教科で初めて習ってきた英語の知識を活用することができたように思う。やっていることは簡単な文かもしれないけれど、スピーチとして話したり、日常会話として話したりと普通の英語ではなかなかやらないことは意外と難しい。そういう意味でも必要のある教科だと思った。個人的に、文系が得意な理系になりたいものである。

○今までの英語の授業とは違い、グループで1つの文を作っていけることが新鮮。自分の間違いもわかるし、プレゼン方法もどんどん出てくる。マ

ンネリ化していると思う英語の授業が楽しくできるようになったと思う。

○I think your class is very good. Please listen to voice. Any one look like a spent happy time in your class. And I'm happy too. Thanks. (原文のまま)

○皆と話し合ったり、発表しあうのが今までの英語の授業と違って楽しい。

2) まとめ

英語の勉強方法を考えるようになった 2 4

英語を好きになった 2 4

自分の英語力不足を感じた 2 2

モチベーションがあがった(もっと英語を勉強したくなった) 2 3

自信が付いた 不安が無くなった 3 3

特に変化は無い 2 3

5. 6 最後に(まとめと今後に向けて)

今回のメタファーを使ったビリーフ研究の結果は、授業を組み立てる上でのナビゲーターの役割を果たした。今後も、こうした事例を増やし、授業モデルを作りあげて行きたいと思う。ケース・スタディー(鈴木、2010)¹⁸⁾などで、学習者のビリーフの変化の過程を探ることができれば、ビリーフ研究に、さらに貢献できると考える。また、教師の持つビリーフと学生のビリーフを対話させながら学生の英語学習モデルを作ることで、これまでのビリーフ研究の幅が広がると考えられる。

英語のプレゼンテーションを目標とした授業で40人近くの学生がいる授業は、運営上工夫を要するが、学生のoutcomeを増やし、学生を把握することができるような活動、授業案を考えた。同時に、多人数であることで、より実社会に似た多様性をクラスにもたらしこともあり、現に学生の中にも他の学生から学ことが多いという感想を得ている。

今回の授業で、学生の発表をグループでおこなったことは、学生には評判がよかった。私がすべての学生の発表を聞くことができないというマイナス点はあったが、peer evaluationを入れたことと、発表原稿を提出したことで、一応全員の発表内容をチェックできた。学生のこうした発表で、私自身、彼(彼女)等の様々な側面を知ることができた。学生文化の知識は、授業を組み立てていく場合に有益である。

学生の感想は、evidence(証拠)というよりも、

私にとっては treasure (宝物) である。授業とは、私と学生が出会う場であり、socialization が、私と学生、学生間でもおこなわれることを望む。learning とは、与えるだけではなく、お互いのことを知り、学ぶことである。そういう意味では、グループ活動、発表を取り入れた授業で、学生の相互理解が深まったように感じた。

今後への提案であるが、ライティング・センターのような施設があり、学生が書いた英文をチェックしてもらえるところがあるとよいと思う。留学生の活用も一考であろう。

また、今回の研究、実践を通して、「英語ができない」との自己評価をしている学生が多いことが彼(女)等の英語学生へのモチベーションに影響を与えていることがわかった。TOEIC の結果なども影響していると考えられる。JABEE の卒業までの最低目標は TOEIC 400 点以上取得であるが、高校生でも 700 点以上取る生徒も多い中で、400 点では、cultural capital (資格としての価値) には成りにくい。テストの結果や、資格を取ることに端を発したモチベーションは、継続性がないように感じる。英語の力をテストのみで測るのではなく、コミュニケーション能力、発想力、理解能力など多角的な角度からの評価方法を取り入れていくことが望まれる。英語の力は、ペーパーテストだけではなく、総合的な活動で測るものであるとわかれば、学生のモチベーション向上にも寄与すると思う。英語が面白い、もっと知りたい、と感じることで、自主的に英語を勉強するようになるであろう。結局、学生に必要なことは、英語を通して世界を知り、海外に出ても、いろいろな人とコミュニケーションが取れる人間力なのである。

前期の授業を振り返り、私自身、いろいろなことを学んだ。後期では、さらに発展させたプレゼンテーション、ディベートを取り入れ、トピックも環境問題・社会問題などを取り上げて、様々な考えが交叉し、活発な意見交換ができるような、そして同時に、英語を通して異文化を理解し、同時に、自分の文化を振り返るような授業を目指したい。

参考文献

- 1) 臼田 悦之:「プレゼンテーション重視の英語授業の研究」, 高専教育, 第 33 号, pp.1-6 (2010).
- 2) 武田 淳:「英語教育と JABEE」文部科学省教育通信

- No. 230, pp. 24-25 (2009).
 - 3) 工藤 雅之:「中と外から見た高専英語教育」文部科学省教育通信 No. 225, pp. 24-25 (2009).
 - 4) 亀山 太一:「高専英語教育の現状と展望」, 文部科学省教育通信 No. 218, pp. 22-23 (2009).
 - 5) A. Tsui : In K. Bailey and D. Nunan (eds), *Voices from the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. (1996)
 - 6) D. Nunan : *Second language teaching and learning*. Boston: Heinle & Heinle (1999).
 - 7) K. Kato, & D. Yamaoka: *Changes of a novice English teacher*. Paper presented at 52th Chugoku-shikoku Kyoiku Jiyu Kenkyu (2000).
 - 8) A. Wenden : *How to be a successful language learner* *Learner strategies in language learning*, pp.103-117 (1987).
 - 9) Y. Hashimoto : *A study of learners' beliefs about learning language using BALLI Nishongo Kyoikuron* Shu. 8. Tsukuba University Ryugaku Center. pp. 215-241 (1993).
 - 10) C. Kramsch : *Metaphor and the subjective construction of beliefs*. *Beliefs about SLA: New research approaches*, pp. 109-128 (2006).
 - 11) 鈴木 栄 : *Learners' beliefs and change*, 英語教育研究, 第 45 号, pp.9-26 (2010)
 - 12) 佐藤郁哉: 質的データ分析法, 新曜社 (2008).
 - 13) B. Norton : *Changing perspectives on good language learners*, *TESOL Quarterly*, vol. 35, pp. 307-322 (2001).
 - 14) T.J.C. Murphey and C. Li-Chi : *Learners' construction of identities and imagined communities*, pp. 83-100 (2004).
 - 15) P. Bourdieu : *Language and symbolic power*, *Social Science Information*, vol.6, pp.645-668 (1991).
 - 16) 加賀谷哲也 : 「英語嫌いの大学生をどう英語好きにするか」 *The English Teachers' Magazine*, pp.28-30 (2010).
 - 17) 都築幸恵・新垣紀子 : 「心理学から見る、学習嫌いの生徒の心理とその対処」 *The English Teachers' Magazine*, pp.35-37 (2010).
 - 18) 鈴木 栄 : *A Study on Japanese Secondary School Students' Beliefs about English Learning*, 英語教育研究 第 41 号, pp. 7-21 (2005)
- [受理年月日 2010年9月30日]